

イエスのことば 第 66 回 「罪人たち」に向き合う神の態度

あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。

(ルカ 15 : 7)

ここでの「あなたがた」は、イエスの弟子たちではない。パリサイ人たちと律法学者たち、すなわち、イエスをメシアとは認めようとしない指導者たちである。

「一人の罪人」とは、だれか。「悔い改める必要のない九十九人」とは、だれなのか？

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら学ぶ。
 - (1) 起：紀元 26 年秋の受洗から、翌 27 年春のメシア宣言を経て、宣教開始まで
 - (2) 承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける
 - (3) **転**：紀元 29 年春から約 1 年、弟子訓練の時期
 - (4) 結：紀元 30 年 4 月 2 日エルサレム入城、7 日十字架、9 日復活、復活から 40 日後に昇天
2. **転**の部
 - (1) 春から秋までの半年、異邦人地域へ 4 回の旅行。目的は休息と弟子訓練
 - (2) 紀元 29 年秋 10 月、仮庵の祭りのためにエルサレムへ
 - (3) 仮庵の祭りの後は、信者の家々を訪ねて旅
 - (4) 冬 12 月、宮清めの祭りのためエルサレムに。捕らえられそうになるが脱出。
 - (5) ヨルダン川の東（ペレア地方）へ。信者の家々を訪ねて旅。**翌年 4 月 1 日まで（約 3 か月間）**
3. **転の部の最後の約 3 か月の間にて**・・・記事は、全部で 15

前回は、【②招待客たちに断わられた大宴会のたとえ話（ルカ 14 : 1~24）】
大宴会に招待されているが、いざその日となったら皆、出席を断ったので、他の人が集められるという話。
断った招待客たちとは、パリサイ人たちや律法学者たち、指導者層。
大宴会とは、神の国。イエスを拒否したことは、神の国への招待を断ったということである。
他の人とは、イスラエル人の中でも貧しい人たち、そして異邦人。

次の記事は、【③キリストの弟子として歩むための心得（ルカ 14 : 25~35）】
特にフルタイムの弟子を志す信者に、犠牲を払うことを覚悟せよという指示。

今回は、【④「罪人たち」に向き合う神の態度】を扱うこととする。

□アウトライン 「罪人たち」に向き合う神の態度 (ルカ 15 章)

1. 場面設定 (1～3 節)
2. いなくなった一匹の羊を、見つけるまで捜し歩く羊飼いのたとえ話 (4～7 節)
3. なくした銀貨一枚を、明かりをつけて注意深く探す女の人のたとえ話 (8～10 節)
4. 放蕩息子の帰りを迎え、喜んで受け入れる父親のたとえ話 (11～32 節)
5. まとめ

「罪人たち」に向き合う神の態度

1. 場面設定 (1～3 節)

1～3 節 さて、取税人たちや罪人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。すると、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。

- 罪人たち・・・遊女 (売春婦) たちを指す。「遊女」ということばを口にするのを避けて、「罪人たち」と婉曲的に表現する。同様の表現は、マタイが弟子になったときの記事などにある (マタ 9 : 9～13、マコ 2 : 14～17、ルカ 5 : 27～32、7 : 34)。ルカ 5 : 29 では、「取税人たちやほかの人たち」。
ルカ 7 : 36～50 は、「一人の罪深い女」がイエスを救い主として信じた記事。
- パリサイ人たち、律法学者たち・・・彼らは民衆に「広い道」を教えていた。イスラエル人であれば、全員が神の国に入れるという教えであるが、その広い道にも例外があり、取税人たちと遊女たちは、イスラエル人であっても神の国には入れない、と教えていた。
 - 取税人・・・外国の手先となって税を取り立て、私腹を肥やす裏切り者だから。
 - 遊女・・・旧約聖書では「そのような女には近づくな」と警告されている (箴言 5 : 3～14) から。しかし、当時は、簡単に離婚を認めるパリサイ派の口伝律法のために、不条理に離婚されて行き場がなくなり、生活に困窮して遊女となる女性が多かったという背景がある。
- 文句を言った・・・パリサイ人たちや律法学者たちにとって、取税人たちや遊女たちは、イスラエル人から切り捨てられるべき人々であるのに、逆に受け入れて一緒に食事をするなど、とんでもない、と文句を言ったのである。そんなことをするイエスはメシアであるはずがない、という思いもある。
- そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された・・・そこでイエスは、神がそのような取税人たちや遊女たちをどのように見ておられるのか、切り捨てるのか、それとも受け入れるのか、次に 3 つのたとえ話を語る。

2. いなくなった一匹の羊を、見つけるまで捜し歩く羊飼いのたとえ話（4～7 節）

4～6 節 「あなたがたのうちのどれかが羊を百匹持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つかるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけたから』と言うでしょう。

7 節 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。

- あなたがた・・・パリサイ人たちや律法学者たち
- 一人の罪人・・・「罪人たち（遊女たち）」の一人
- 悔い改める必要のない九十九人の正しい人・・・パリサイ人たちと律法学者たちを指す。自分たちはモーセの律法を持っているイスラエルの民であり、律法も持たず汚れている異邦人とは、そもそも違う。まして、イスラエルの中でも特に自分たちは厳格な規則に従って生活しており、きよめの儀式もきちんとするし、毎週決まった日に断食もするし、収入の 10 分の 1 もきっちりと神殿に納めている。自分たちには悔い改める必要はないと思っていた。

3. なくした銀貨一枚を、明かりをつけて注意深く捜す女の人のたとえ話（8～10 節）

8～9 節 「また、ドラクマ銀貨を十枚持っている女の人が、その一枚をなくしたら、明かりをつけ、家を掃いて、見つけるまで注意深く捜さないでしょうか。見つけたら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『一緒に喜んでください。なくしたドラクマ銀貨を見つけたから』と言うでしょう。

- 明かり・・・明かり、すなわち光は、聖霊を象徴する

10 節 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。

4. 放蕩息子の帰りを迎え、喜んで受け入れる父親のたとえ話（11～32 節）

このたとえ話は第一幕と第二幕から成る

第一幕・・・弟息子の物語。起承転結の四部構成

第二幕・・・兄息子の不満と父親の応答

第一幕 弟息子の物語(起) 放蕩

11～13 節 イエスはまた、こう話された。「ある人に二人の息子がいた。弟のほうが父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。

(承) 没落

14～16 節 何もかも使い果たした後、その地方全体に激しい飢饉が起こり、彼は食べることに困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせた。彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。

(転) 悔い改め

17～19 節 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』

(結) 帰還と回復

20～24 節 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』

ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた。

- まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて・・・父親は待っていた
- 一番良い衣、指輪、履き物・・・この家の息子としての地位にあることを示すもの。父が子に与える最大の荣誉である。

第二幕 兄息子の不満と父親の応答

25～30 節 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえてきた。それで、しもべの一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。しもべは彼に言った。『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。』

すると兄は怒って、家に入ろうとしなかった。

それで、父が出て来て彼をなだめた。

しかし、兄は父に答えた。『ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。それなのに、遊女と一緒にお父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。』

- 家に入ろうとしなかった・・・食事の席に着こうとしなかった
- あなたの戒めを破ったことは一度もありません・・・罪を認めていない
- 子やぎ一匹下さったこともありません・・・父親に対して不満を言っているが、この不満は的外れ。兄息子も弟といっしょに財産を分けてもらった（12 節）。
- そんな息子のために・・・「私の弟」とは呼ばず、「そんな息子」と呼んで、「あなたの息子、私には関係ない人」と言わんばかりであり、軽蔑し、切り捨てている。
- 兄息子はパリサイ人たちや律法学者たち、弟息子は取税人たちや遊女たちである。

31～32 節 父は彼に言った。『子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。』

- 私のものは全部おまえのものだ・・・「私のもの」とは、父親のもの。「全部おまえのものだ」とは、父親のものは全部、子が相続権を持っている、という意味。相続はまだだから、兄息子は、まだ父親のものを受け取っていない。
- 弟は父親から、「一番良い衣、指輪、履き物」（22 節）が象徴する **子としての栄誉** を受け取った。兄は、そのような栄誉をまだ受けていない。自分を正しいとする傲慢を改め、父の愛に感謝するなら、その栄誉を自分のものとするのに、兄にはそれがわからない。

5. まとめ

- (1) 三つのたとえ話は、三位一体の神が、「罪人たち」にどう向き合ってくださいるか、教えている。
- ① 子なる神・・・見つけるまで捜し歩く
 - ② 聖霊なる神・・・見つけるまで注意深く捜す
 - ③ 父なる神・・・帰りを迎え、神の子としての地位を回復してくださる
- (2) 三つのたとえ話は、罪人が悔い改めて神に立ち返るなら、神はどう思われるのか、を教えている。・・・大きな喜びが天にある（7 節）、神の御使いたちの前には喜びがある（10 節）、祝宴を設けるほどに喜び祝う（24 節、32 節）
- (3) 私たち信者は皆、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」（24 節、32 節）者たちである。御子が見つけるまで捜し歩いてくださった。聖霊が見つけるまで注意深く捜してくださった。そして、父なる神は、御子と聖霊を遣わし、私たちを待ち、私たちを迎え、大いに喜んでくださった。